りっぱな香箱をこんなにこわしてしまって――。」

かし子は、チリメンの布をしっかりと胸に抱いて、養母を見返します。

「そうではない。私はこの布がほしかったの。そんなりっぱな香箱とは思わなかった。この布だけがきれいだったの。」

と言いたいのですが、ことばになりません。あまりにきつくしかられたので、こわくて口がきけず、あやまることもできませんでした。

「まったく、わからずやだよ、九つにもなって――。」

「まあ、なんて強情な子なんだろう。」

何も言わないかし子に怒った養母は、

「少しは、ひとりで反省しなさい。」

と、かし子を部屋の柱にしばりつけて、出ていってしまいました。

ふだんでもうす暗い裏長屋に、物売りの声が聞こえて、だんだん夕暮れがせ